

述語が何であるかについて

山田 健二

1. 述語とは何だろうか。主語がその指示対象をもつように、述語もまたその指示対象をもつのだろうか。もつのだとすれば、それはどういうものだろうか。述語とは、与えられた主語に対してその属性または性質を帰属させるようなものである。この際、述語は二つの側面をもつ。一つは、主語に帰属されるべき性質を指し示すこと、もう一つは、主語を受け取って、その主語についての一つの言明（または命題）を形成することである。性質であり、かつ、言明を形成せしめるものであるようなものとは、何であろうか。

性質を指し示すという側面のみを問題にするのなら、述語とは「普遍」であるといえるかもしれない。「人間である」という述語は、「人間性」（という一般名）が指示するのとまさに同じ「普遍」を指示すると。この考えはラッセルの『数学の原理』のものである。何であれそれについて考えることができるものは、何らかの意味で「存在」しなければならない」といった主張を、そこに見ることができる（『数学の原理』、s.427）。彼によれば、我々が述語について考えることができる以上は、それは何ものかであり、存在するのである。

他方フレーゲは、命題を形成するという側面を強調するかのよう、述語を不完全者と理解した。そのいうところは、述語とは、主語として生じる別の対象によって「充填」されるのでなければ命題にあらわれることができないようなものだということである。述語を、あたかもそれが個体が個体類似の存在者であるかのように、主語として言及することはできないとフレーゲは考える。「人間である」という述語について、それを主語とするような仕方では何ごとかを述べることはできないし、そもそも「人間である」という述語」という言い方がすでに誤っている。というのは、それは述語をあたかも固有名であるかのように語るからである。フレーゲによれば、述語とは何かに述語付けされてのみあらわれることができるのである¹。

ラッセルが述語に「普遍」という存在者を割り当てるとき、彼はフレーゲのこの見解にいくらかの批判を加えている（同、s.483, s.49）。焦点となるのは、「言及する」、「そ

れについて考える」ということである。述語を主語として言及することができないのなら、我々は述語に関してはいかなることも考えることはできないということとなるとラッセルは考えるが、それももつとものことであろう。我々は現に（個々の）述語について何ごとかを述べることができるようにみえるし、述語一般について何ごとかを述べることができるようにみえるからである。「人間である」という述語について何ほどかの解明が可能であろうし、「ソクラテスについて述べられるあらゆることからは、プラトンについても妥当する」というような言明、すなわち、「任意の述語 ϕ について、ソクラテスが ϕ なら、プラトンも ϕ である」も、日常的でないわけではない。後者の言明で、束縛変数 ϕ の値となるものは述語である。どちらの場合も、我々は、述語に、それを主語として、あるいは何らかの存在として、言及しているようにみえる。もしフレーゲが正しいなら、我々は述語に関して、我々が意図することを決して語り得ないということになる。というのは、それを主語として言及するなら、我々は述語ではない何か別の対象について言及しているということになるだろうから。

だが我々は、ラッセルとフレーゲを互いに対極する立場に置くことで満足するわけにはいかない。フレーゲは、不完全である述語とは何かという問題、述語として用いられるのみであるようなものについて言及するとはどういうことかという問題に答えなければならない。一方、ラッセルは、述語の第二の側面である、命題を形成せしめるものという側面を無視したのではない。『数学の原理』で彼は、フレーゲの（不完全者である）述語に対応する概念として、「主張」なる概念を提示している（同、s.48, s.52）。「主張」とは、命題から主語を取り除いて残るものであるとされる。それは命題という「統一体」の「統一の担い手」であり、また、例えば「ソクラテスについて述べられる（主張される）何ごとか」という変数の値となるものと目されるものである。そしてこの「主張」を存在へともたらすこと、言うならば「個体化する」こと、ここに少なからず問題があることを彼もまた認めていたのである。要するに、フレーゲもラッセルも、一つの問題を共有していたといえる。それは「述語に言及するとはいかなることか」、あるいは「述語を存在として言及するとはいかなることか」、要するに、「述語とは何であるのか」という問題である。

私はこの論文で、ラッセルが述語あるいは彼の言う「主張」に関して、いかなる困難に遭遇し、どのようにそれを解決しようとしたのかを検討したい²。彼の結論は、1918年の『論理的原子論の哲学』である。そこで彼は、以前の「普遍」という概念を論じることとをさげ、「述語は述語としてあらわれる以外の仕方であらわれることはない」とい

う、明らかにフレーゲ的な見解を述べている (p.205)。そして彼は、この見解を「タイプ理論」に基づくものであるとしている。彼はいかにしてこの見解に到達したのだろうか。そしてこの見解は、述語を何であると語るのだろうか。

2. まず次のことを確認しておきたい。ラッセルは早くから、命題の構成要素が命題にあらわれる仕方に区別を設けていた。『数学の原理』の原型となるいくつかの草稿で、彼は、すべての命題が「もの」と「概念」とからなること、そして、「もの」は「項として」命題にあらわれるのみであるが、「概念」は、「項として」も、また「意味として」も命題にあらわれうるということを述べている。「項」とは、「何であれそれについて考えることができるようなもの」であり、「存在」の別名であるとも言われる。「項として」命題にあらわれるとは、主語としてあらわれるということである。「もの」は主語としてあらわれるのみであり、決して述語としてはあらわれないというわけである。また、「概念」とは述語に相当するものであり、それが「意味として」あらわれるとは、述語として、つまり、何かに述語付けされた限りであらわれるということである。だが、我々が「概念」について何ごとかを考えることができる以上は、「概念」は「項として」も、つまり何らかの存在としてしても命題にあらわれることができるのでなければならない。かくして概念、つまり述語は、「意味と存在の二重性」³をもち、いずれの仕方で命題にあらわれようとも、それは同一のものであるし、そうでなければならないとラッセルは考えるのである。

「意味」を存在として言及するとはいかなることかということこそ、ラッセルが繰り返し直面しなければならなかった問題なのであった。述語を性質と捉えるなら、「普遍」という存在を想定してそれに割り当てることができる。だがいわゆる「ラッセルのパラドックス」はこの方策をおびやかすことになる。いま、「自分自身について妥当しない」という述語を F とすれば、 $F(x)$ であるとは、 $\neg x(x)$ であることである。だが F を F 自身について問うなら、 $F(F) \equiv \neg F(F)$ となり、矛盾が生じる。したがって述語 F は、 F 自身に対しては定義され得ず、その適用範囲の全域（ラッセルにおいては、これは「それについて考えることのできるあらゆるもの」にわたる）で定義されている述語ではないということになる。これは F の（フレーゲ的な意味とは異なる）不完全さを示すものであり、それをある定まった存在と考えることができないことを暗示する。

述語をラッセルの言う「主張」として、つまり命題を形成するものとして捉えることに徹底するなら、のちに見るように、このパラドックスに対処することができる。だ

が（ラッセル的）「主張」は、もしそれが何らかの存在者であるのなら、個体とはあまりにも異なった存在者であろう。実際それは、以下で見るように、命題（ラッセルにおいてはこれもまた、構造をもつという、「特異な」存在者である）に本質的に依存した存在者なのである。

「 a が人間なら、 a は死ぬ」は、 a について述べられている命題の一つであり、 ϕa という形で表記することができるようにみえる。あるいは ϕ は、変数「 a について述べらる任意の述語」の一つの正当な値であると思われる。だがここで「 ϕ 」であらわされるものは、「人間である」という述語と「死ぬものである」という述語との単純な複合ではない。それは主語（の「理念」？）を巻き込んだ複合である。フレーゲ的に、 $\phi(a)$ から「 a 」を単純に取り除くなら、「 $()$ が人間なら、 $()$ は死ぬ」というものが得られる（「 $()$ 」は主語がこの位置にあらわれるべき「空所」を意味している）が、ここで二つ目の空所が照応的に前の空所を指示しているということが何らかの仕方でも示されなければならない。もちろんそれは空所に添え字をつけるなどして示すことができる。だがそのような添え字が必要であることは、問題の述語が、元の命題、あるいは a の代りに別な主語をとる命題、あるいは、まったく「不特定な」主語をとる命題に依存していることを示している。というのは、添え字を正当化するものは、一つの定まった命題において、同じ個体が二度あらわれているということにほかならないのであるから。このように、述語は、命題（および主語）から独立して自存するものであるというより、命題（および主語）への何らかの参照を含むものなのである。これにより命題についての見方も異なってくる。命題は、それぞれ独立した主語と述語によって構成される構成体であるというより、（不特定な）命題から「抽象」された述語をある主語に対して適用したものだということになるだろう。

ここで問題となっている複合性は、「人間である、そして、死ぬものである」というような、（性質としての）述語の単純な複合性ではない。このような複合性ならば、それを単なる語彙の問題として、その複合性を解消することもできるだろう。「あるものが人間であることが、それが死ぬものであることを含意すること」という（擬似？）述語における複合性は、主語への参照を含んでいることによる複合性であり、それゆえに、解消することのできない複合性なのである。

3. 自己論駁的述語の問題は、個体変数と述語変数（関数変数）（とさらにはより「高階の」述語変数）を区別すること、あるいは個体（主語）と述語に「タイプ」の違いを

認めることによって解決できる。実際フレーゲによれば、述語は「階層」をもち、述語に適用されるような述語は「二階の」述語であって、個体に適用されるべき「一階の」述語とは区別されなければならない⁴。したがって「自分自身については妥当しない」という一階の述語を、自分自身に適用することはできない。ラッセルもこのことを自覚していた。だが述語のフレーゲ的不完全性を認めないラッセルは、変数に種類があり、それぞれ異なる変域をもつということ、要するに、存在にタイプの区別を設けることの正当な理由を必要とする。

「変数」はラッセルにおいては、単なる文字でも、添え字付きの空所でもなく、文字どおり変化する(variable)特殊な存在者であるということに注意しなければならない。彼の「表示」という概念は、本来この特殊な存在者を説明するためのものであり、既に触れた「意味と存在」の区別を、彼はここにも適用するのである⁵。すなわち、変数は「意味と存在」の二重性をもち、それを含む命題に対して命題の構成要素として寄与するものは、変数の「意味」としての側面であり、命題が実際に関心をもち、命題が配慮するもの、命題に関与する(relevant)ものは、変数の「存在」としての側面である。つまり、「スコット」と『ウェバリー』の著者のような、異なる「意味」をもつが、存在としては同一のものであるような二つのものを、命題は区別しない。変数が、『ウェバリー』の著者のような、一般に「表示概念」の典型的なケースとして理解されているものと異なるのは、「存在」としては変数は、文字どおりさまざまな存在者である、というこでとある。変数とは、有限の意味を表現し、「存在」としては無限にさまざまなものであるもの、「多義的」(ambiguous)であるようなものなのである。変数をこのように捉えることで、ラッセルは、有限の長さ、複雑さしかもたない命題が一般性にあずかり得ることを説明するのである。また、ラッセルにおいては、変数は唯一のもの、すなわち変域に制限のない、(およそ考えることができる)あらゆる存在者であるところの、独立変数があるだけであり、他の変数は、それから派生するものとされる。そうであればこそ、ラッセルが個体変数と述語変数の本質的区別を受け入れるには、自己論駁的述語を排除するというアドホックな理由だけでは足りないのである。

ラッセルはいわゆる命題関数を、「従属変数」として扱っている。「命題関数」とは、その関数値として命題を与えるような関数のことであり、ラッセル的に言えば、(独立)変数と述語からなる構成体、とひとまずいえるようなものである。その関数値は、独立変数、つまりその関数のアーギュメントの変化に応じて変化する。例えば「 x は人間である」という命題関数は、独立変数 x がソクラテス、プラトン等々と変化するのに対応

て、その値を「ソクラテスは人間である」、「プラトンは人間である」等々と変化させる。つまり、命題関数は独立変数に依存的に変化する「従属変数」であるというわけである。ラッセルは、この従属変数において、独立変数の変化を通じて変化せずにとどまるものを、狭義の関数とし、関数とは何であるかを問うている。この間は、これまで述べてきた「述語とは何か」という間と同じものである。

命題関数も変数であるからには、「意味と存在」の二側面をもつ。『プリンキピア』に「多義的な主張 (ambiguous assertion)」なる概念がある (p.17)。要するに、命題関数の端的な使用であり、命題関数を、その独立変数を束縛しないまま主張するというものである。これが命題関数を使用する典型的なケースとなる。例えば「 x は人間である」という主張された命題においては、命題関数「 x は人間である」の「意味」が表現（使用）され、（使用において）実際に主張されているのは「ソクラテスは人間である」「プラトンは人間である」等々という個々の命題だというわけである。「意味」は表現（使用）されている限りは問題を含むものではない。問題が生じるのは、「意味」それ自身が命題に関与する場合、つまり、「意味」がそれとして言及されるような場合である。「意味」が「存在」として言及される、というのは実際パラドキシカルな事態ではある。というのは「意味」は表現（使用）使用される限りで何ものかを表示するのであり、「存在」である「意味」はもはや表示を行わないだろうからである。したがってそれは、「意味」と「存在」の二重性をもつようなものであるというより、端的に「存在」であるようなものとなる。「意味と存在の二重性」があるのではなく、二つの「存在」があるということになってしまう (OF, p.383) のである⁶。

命題関数の「意味」が命題に関与するのは、まず、「 $(\forall \phi)(\text{ソクラテスが}\phi\text{なら、}\cdots)$ 」のような、命題関数が変数の値となるような一般命題、つまり、命題関数について一般化された命題である。ここで独立変数 ϕ の値となるものは、命題関数の変化する「存在」ではなく、変化しない「意味」である。もし命題関数の「意味」がそれとして言及することができないものならば、それが変数の値となることは不可能であり、命題関数についての一般命題を主張することも不可能であるとラッセルは考える。

ラッセルはまた、「 $(\forall x)(x \text{ が人間であるなら、}\cdots)$ 」のような、個体について一般化された命題をも、命題関数の「意味」が命題に関与するケースと理解する。というのは、この命題に関与するのは、命題関数「 x が人間であるなら、 $\cdots$ 」の「多義的」存在ではなく、むしろその多義性そのものであるからである。ラッセルはこの命題を、「(従属変数)「 x が人間であるなら、 $\cdots$ 」のすべての値が真である」とパラフレーズする。「p

のすべての値が真である」という形の命題においては、「p」がさまざまなもの（多義的なもの）であるということが前提になっている。（実際「p」に多義的でないもの、例えば「ソクラテス」を代入するなら、得られるものは無意味な文字列である。）だが「p」の多義的な値自身は、もはや命題の関与するところではない。むしろ多義性は、いわば相殺されているのである。言い換えるなら、変数はもはや変化することなく、その意味で「見かけの変数」へと転じている。そういうわけで、この命題に関与するのは、「x が人間であるなら、…」の「意味」なのである。

4. だが「存在としての意味」の問題は後節まで棚上げすることにして、ラッセルが個体変数と述語変数との区別をどのように正当化したかを見ることにしよう。述語変数の値となるものは、上述のとおり、命題関数の「意味」である。命題関数の「意味」は、独立変数の「意味」と（性質としての）述語とからなる構成体であり、そこで述語変数の値としては、構成体でないような存在者は排除されると考えることができる。例えば「 $(\forall \phi)(F(\phi x) \supset G(\phi x))$ 」のような命題において、独立変数として機能しているのは「 ϕ 」であるが、それが「x」とともにあらわれることによって、そのことが示されるとラッセルは考える。ここでの「x」はもはや「変化するもの」ではなく、それ単独で意味をもつものですらなく、変数 ϕ の値となるものがその形の構成体であることを思い出させる働きをもつだけのものだというわけである。

だが自己論駁的述語をさけるためには、述語変数の値から個体を排除するだけではならず、個体変数の値から述語を排除する根拠を示すことも必要である。本質的に構成的存在であるとしても、述語が何らかの存在である以上は、それも個体変数の値としてあらわれうると思われるからである。

個体変数と述語変数を区別する正当な根拠は、『プリンキピア』においてようやく与えられることになる。だがそれを見る前に、『プリンキピア』における「命題関数の表示」に関して若干述べなければならない。というのは、それに先立つ論文「表示について」で、ラッセルは「表示」という概念を放棄したかに見えるからである。だが実際のところ「表示」が放棄されたのは、『数学の原理』で「表示概念」としてあげられている、「the F」「all F」「any F」「some F」「a F」という形のものに関してであった。命題関数に関しては、『プリンキピア』においてもラッセルは依然として、それを表示するものとして考えている。実際命題関数 ϕx において、彼はその関数そのものを「 $\phi \hat{x}$ 」と表記して関数値と区別し（p.15）、さらには、「 ϕx 」は ϕa 、 ϕb 、 ϕc 等を、多義的に

表示する」とはつきり述べている (p.39) のである。 ϕx と $\phi \hat{x}$ の違いは、変数の作用域の違いとしても理解できる。「 $\phi x \supset \phi x$ 」が命題の一部となると、変数「 x 」はそれぞれ、この含意式全体をその作用域とする。二度目の「 x 」は最初の「 x 」に拘束されているのである。他方、「 $\phi \hat{x} \supset \phi \hat{x}$ 」が命題の一部としてあらわれるときには、それぞれの「 x 」の作用域は、それぞれの命題関数にしか及ばない。一方を「 y 」に換えても、元の命題には何の影響もない (p.15)。

とはいえ、『プリンキピア』での「命題関数の表示」は、以前のような「意味と存在」を対照させることに力点をおくものというわけではない。むしろ「原型とその事例」の関係を示すものとして理解されるべきものである。個体変数と述語変数との区別を説明するのは、この「原型－事例」関係なのである。

まずラッセルは、次の「悪循環原理」を提出する。「関数は、当の関数自身によって定義されたいかなるものも、有意意味な仕方でそのアーギュメントに取ることはできない」。この原理は、そのアーギュメントに自分自身を取るような、「 $\phi(\phi x)$ 」のような形の命題を無意味として排除する。だがこの原理の根拠は何か。ラッセルによれば、関数 ϕx は、命題 ϕa 、 ϕb 、 ϕc 等の（事例から抽象された）「原型」として、これらの命題の「共通の形」を示しているものとして考えられなければならない、というのがその根拠なのである。ここでは命題関数が（その関数値として）（諸）命題を規定するというのではなく、逆に、「共通の形」をもった一連の諸命題が、命題関数を規定するとされる。「関数は、その値があらかじめ確定していない限り、確定しない」(p.40) のである。以前の説明では、従属変数 ϕx は、変数 x の値の決定に依存的に、その関数値が決定されることになっていた。このような説明においては、関数 $\phi \hat{x}$ が何ものかである限りは、それ自身が変数 x の値として決定され、自分自身に適用されるのを妨げるものは何もない。つまり「 $\phi(\phi \hat{x})$ 」は従属変数 ϕx の正当な値の一つのはずである。だが新しい解釈では、変数 x は、もはや「独立」に変化するのではなく、むしろその原型として ϕx を提供するような一連の諸命題の、その位置にあらわれる限りの項を、表示するのである。この解釈のもとでは、 ϕx 自身が ϕx のアーギュメントとなることは、 $\phi(\phi x)$ が ϕx と異なる「形」であるがゆえに、端的にナンセンスとなる。 ϕx がその原型となる諸命題のクラスには、 ϕx 自身がその主語となる命題は存在しないのである。

この説明では、「原型」はその諸事例に依存するということになるようにみえる。 ϕx が、 ϕa 、 ϕb 、 ϕc 等から定義されるのだとしたら、諸事例にあらわれている「 ϕ 」は何であるというのか。結局それは振り出しに戻って、性質としての述語だということ

になるのではないのか。「関数値はその関数を前提にしない……。命題「ソクラテスは人間である」は、それを命題関数「 x は人間である」の値であると考えなくても、完全に理解することができる」(p.39) とラッセルは言う。あたかも命題「ソクラテスは人間である」が、個体ソクラテスと普遍人間性とかからなる構成体であると言うかのように。だが同じ箇所ではラッセルは、命題関数はその関数値が実際に与えられなくとも理解可能でなければならないとも主張する。というのは関数値は無限に存在し、そのすべてが我々に与えられることはないだろうからである。「必要なのは、[関数] 値が一つ一つ外延的に与えられることなく、[関数] 値の全体が内包的に与えられることである」(p.40)。してみると、命題関数はやはり「原型」と呼ばれるにふさわしいものであろう。命題関数 ϕx は、分離可能な ϕ と x とからなる構成体ではなく、 ϕa 、 ϕb 、 ϕc 等にあられる「 ϕ 」をまさに表現するものなのである。つまり、具体的事例である ϕa は ϕ と a からなる構成体であるが、その「 ϕ 」とは、「 ϕx 」によって示される命題の原型にほかならないのである。

5. このようにして、ラッセルは、述語をフレーゲ的に命題を形成するものとして捉える立場へと到達した。だが述語がそのようなものだとなれば、述語について考えること、述語について言及することはいかにして可能なのだろうか。この点についてラッセルから直接答えを引き出すことはできないが、フレーゲが興味深い解決を示している⁷。その解決は個体と述語との対照をよりいっそう鮮明にするものであり、個体と述語とが「タイプ」を異にするというラッセルの到達した立場にすでに暗示されてもいることである。個体と述語が異なる種類の存在であるのなら、それについて言及する仕方それぞれ異なっていけないわけがない。フレーゲが示唆するは、まさに、述語に言及するそれ特有の仕方なのである。

フレーゲはすべての表現に指示と意味とを区別する。表現の指示とは、第一にその表現がその代理となっていてところのもの、その表現に対応するもの、それであるような存在であり、第二に、その表現があらわれる命題の真理値に寄与するものである。表現の意味とは、その指示の、いうならば、ある特定のあらわれ方であって、指示対象の決定に寄与するものである。

述語に割り当てられるべき指示とは何だろうか。自然に考えられるのは、述語を充足するような対象からなるクラス、つまり述語の外延、をその指示とすることである。だがこれは、個体と述語の相違を不鮮明にする。述語とは個体によって「充填」される

べき、本質的に不完全な存在なのである。解決の糸口は、二つの表現が同じものを指示するとは、それらが互いに命題の真理値を変化させずに他のものと置き換え可能であるということだとする、フレーゲ的な「外延の立場」である。「ソクラテス」という固有名が、「ソクラテス」が指示するもの」という表現とまさに同じものを指示するのと同様、「人間である」という述語は、「人間である」が指示するもの」とまさに同じものを指示するであろう。そうだとするなら、「人間である」が指示するもの」は、「人間である」と同様の（フレーゲ的）「不完全性」をもつであろう。つまり、「人間である」が指示するもの」も実は個体によって充足されるべき述語であり、正確には「()」は「人間である」が指示するものである」と書かれるべきものなのである。

すると次は妥当な文となることであろう。「ソクラテスは「人間である」が指示するものである」。そしてまた、「プラトンは「人間である」が指示するものである」等々。これは述語の指示がその外延であることを示すものであると思われるかもしれない。だが実は、ここで変数「もの」の変域にあらわれるべきものは、個体ではなく、述語なのであり、「ソクラテスはプラトンやアリストテレスがそうであるところのもの」における「もの」と同様のものなのである。この後者の文は次のように書くことができる。

$$(\exists \phi)(\phi(\text{ソクラテス}) \wedge \phi(\text{プラトン}) \wedge \phi(\text{アリストテレス}))$$

表現 α が a を指示するという関係を $D(\alpha, a)$ と書けば、前者の文は次のようになる⁸。

$$(\exists \phi)(D(\text{「人間である」}, \phi) \wedge \phi(\text{ソクラテス}))$$

述語の指示に関するフレーゲのこの解決は、述語（であるような存在）についての語りかたを示唆するものである。ソクラテスとは何かと問われるなら、我々はソクラテスであるその人を指差し、「彼だ」と答える。同様に、人間であるとは何かと問われるなら、我々はソクラテスやプラトンを指差し、「例えば、彼らがそうであるところのものだ」と答える。この答えのうちに、その存在は、変数の値としていわば間接的に言及されている。これこそが述語にふさわしい言及の仕方なのであろう。我々は、与えられた述語に対して、「例えば、…」とその外延を指摘していくことを通じて、その述語が何であるかを特定していく。そしてまた、その外延を一つ一つ指摘する能力をもつこと、ある個体がその外延に属するかどうか判定する能力をもつこと、これこそがその述語が何であるかを理解していることのメルクマールなのである。

ここに、述語とは何であるかとの問の、認識論的性格が姿をあらわしていると私は考える。述語であるような存在は、我々の述語を用いる能力のうちに描き出されるので

はないか。あるいは、述語とは何であるかとは、述語を理解するとはいかなることであるかという形でこそ問われるべき問なのではないか。ラッセルは『論理的原子論の哲学』で次のように述べている。「述語を理解することは、名を理解することとまったく異なったことがらである。… 例えば「赤い」を理解するには、あるものが赤いと述べることがいかなる意味をもつのかを理解しなければならない。そのような形の命題をもたらすのでなければならないのである。」(p.205) 述語、すなわち、かつては「普遍」と想定されたものとは、我々の認識能力のうちにこそ住まうのではないか。そしてラッセルは、その能力が、特に「命題を形成する能力」であることを示唆している。だがこの能力についてのさらなる解明は今後の課題としなければならない。

註

¹ フレーゲの見解については、Beane ed., 1997, *The Frege Reader*, Blackwell に集められた彼の諸論文を参照のこと。なお、本論文におけるフレーゲの解釈は、Dummtt, 1973, *Frege: Philosophy of Language*, Harvard に全面的に依存している。

² 参照するラッセルのテキストとその略号は次のとおり。なお、参照しているテキストが明らかな場合はテキストを明示しない。

[POM] 1903, *Principles of Mathematics*, Norton

[OMD] 1903, “On Meaning and Denotation”, in CP4

[OF] 1905, “On Fundamentals”, in CP4

[OD] 1905, “On Denoting”, in LK

[PP] 1910, *Principia Mathematica* vol.1, Cambridge

[TK] 1913, *Theory of Knowledge*, Routledge

[PLA] 1918, “Philosophy of Logical Atomism”, in LK

[LK] 1956, *Logic and Knowledge*, Routledge

[CP4] 1994, *Collected Papers of Bertrand Russell* vol.4, Routledge

³ 「意味」と「存在」の区別がラッセルの重要なモチーフの一つであったことは、次の論文に詳述されている。Griffin, 1993, “Terms, Relations, Complexes”, in Irvine and Wedeking ed., 1993, *Russell and Analytic Philosophy*, Toronto.

⁴ フレーゲが二階の述語と考える有名な例は「存在する」である。「ユニコーン」がもし固有名であるなら、「ユニコーンは存在しない」は、適法な記号法のもとでは決して形成され得ないという意味で、ナンセンスな文であるとフレーゲはみなす。というのは、適法な記号法においては、固有名であるような記号は、あらかじめその指示対象がその値として付値されているはずだからである。存在を有意味に主張するには、個体に関して語るのではなく、述語概念について（何らかの意味で）語るのだから。「ユニコーンである」に相当する述語概念として「[] はユニコーン性をもつ」をとることができるなら、「ユニコーンは存在しない」で主張したいことを正しく表現するなら、「どんな個体 x についても、 x はユニコーン性をもつことはない」、あるいは否定記号「 $\sim$ 」をもちいて、「 $\sim$ (ある個体 x について、 x はユニコーン性をもつ)」としなければならない。ここに含まれる二階の述語は、「ある個体 x について、 x は [] で

ある。ここで「 ξ 」は、この二階の述語を充足すべき一階の述語の空所を仮に充足するものであり、述語を充足すべき対象の種類を自然な仕方で制限する説明を与えていることに注意しよう。「ユニコーン」が固有名であるなら、「ユニコーンは存在しない」は、この意味でもナンセンスな文であるということになる。すなわち固有名は仮の充足者を受け入れる空所をもたないのである。

⁵ 「表示」というラッセルの概念を理解するうえで、彼の「変数」に注目すべきことを指摘したのは Hylton である。次のものを参照されたい。Hylton, 1990, *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy*, Oxford.

⁶ OD pp.48-50で述べられる「表示という概念がはらむ困難」は、OD が書かれる直前の草稿 OF pp.382-385でより明確に述べられている。

⁷ この解決は、雑誌掲載を却下され生前未発表に終わった無題の論文で議論されているものである。その論文は“Comments on Sinn and Bedeutung”と仮に題されて Beancy 編集の前掲書に収録されている。ダメットは彼の前掲書の第7章で、この論文に拠ってフレーゲにおける「不完全表現」の指示について詳論している。本節の議論は、これに多くを負っている。

⁸ 対比のために書くと、「ソクラテスは「ソクラテス」が指示するものである」は次のようになる。 $(\exists x)(D(\text{「ソクラテス」}, x) \wedge (x = \text{ソクラテス}))$ 。

[哲学博士過程]

On what a predicate is

Kenji YAMADA

Frege thought a predicate has some incompleteness, which is shown by the fact that a predicate never occurs in a proposition without a supplementation by a certain subject. Thus such a proposition as ‘human’ is a predicate’ is meaningless because it neglects the incompleteness of the predicate ‘human’. If this view is correct, however, it seems follow that we cannot speak anything about a predicate. For this reason, Russell, in his early years, rejected this Frege’s view and hold that a predicate has exactly the same reference as the corresponding noun phrase. For example, the predicate ‘human’ has exactly the same reference as the noun ‘humanity’.

But if we can speak something about a predicate as a subject as though it were an individual, we have no reason to exclude such a ‘self-refuting’ predicate as ‘being not satisfied by itself’. And it leads ‘Russell’s Paradox’.

Russell, in searching for a solution to this difficulty, arrived at the type theory of *Principia Mathematica*, which makes a sharp contrast between a predicate and an individual. But a predicates remains to be a possible value of some variables and this seems to mean that it must have *some* being. If so, what *is* a predicate? Some suggestions will be given.